慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生産的及び不生産的なる語に就て（二）
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.8 (1924. 8) ,p.1139(75)- 1153(89)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240801-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自は常に大なる價値に對して小なる價値を與ふ――若し人が常に等價に對して等價を交換するものとせば、契約者の孰れに對しても利得は發生せざる可し。扨て契約兩當事者が共に利得を得又は得るに相違無きは何故なる乎。是れ諸物は吾人の欲望に相對的なる價値を有し、吾人の欲望は相互に一物に大にして他物に小なる爲である。此問題に就いて人の陷る錯誤の據つて來る所は、商業上に取扱はるゝ諸物が宛も絶對的なる價値を有するが如くに云爲し、其結果交換を行ふ者は相互に等價に對して等價を與ふるを以て公正なりと判斷するに基く。兩當事者相互が大なる價値に對して小なる價値を與ふる事に注意せず、人は多大の省察を拂ふ事無くして、斯くの如きは有り得ざる事なりと思料し、一人が常に小なる價値を與ふる爲には他の一人が常に大なる價値を與ふるの迂愚を爲さゞる可からず。（既に此缺陷あり。彼れらず。是れ人の首肯し得ざる所と思惟するに依る。乍併吾人が賣却に供すと看做さるゝは、吾人の消費に必要なる諸物にあらず。其は余の屢々記せる如くに吾人の過剩品なり。吾人は吾人に無用なる一物を交付し、以て吾人に必要なる一物を獲得せんとす。即ち吾人は大なる價値に對して小なる價値を與ふるものなり」。見る可し。交換に於ては富ならざりし物が富と化し、斯くして商業は富を增加すと（pp. 267-268）。

思ふに如上の所說は其結論にのみ着眼する時は、富の生產を以て唯だ農耕にのみ限局せる Physiocrates の偏見に優越する事萬々なれども、然も斯くの如く見解の乖離を導ける根柢には Physiocrates が專ら交換價値を中心に立論せるに反し、Condillac が價値には單に使用價値あるを以て交換價値あるを見ざりし事實の潛在せるを記憶せざる可からず。既に此缺陷あり。彼れが縷々 Physiocrates の持論に加へたる搏擊も結局標的を逸せる空矢となり、未だ其迷妄を覺醒せしむるに至らざりしは固より自然の歸趨であつた。以之觀之彼れの所說は、交換に於る價値の贏得を單に使用價値のみに限りて交換價値にまで擴張するを躊躇したる Turgot の所說に、果たして實質上幾許の進步を示せるや。聊か疑ひ無きを得ず。畢竟 Condillac の功績は、價値の解釋に關して Turgot よりも一層明晳透徹せる純主觀的純心意的立場を詳述し以て後進を Cantillon 流の邪曲の影響より完全に匡救せる點に在る。

以上は發端創始の時代を彩る客觀主觀兩學說對峙の大樣である。大勢は軈て後說に歸嚮する。Turgeon は曰く「Quesnay の意見、Morellet の辛苦、彼等は遂に認められざるがまゝに過ぎ去れるや否や。吾人之を知らず。Turgot 及び Condillac の著作、彼等は佛蘭西に於る價値觀念の進路に何等影響を及ぼす所無かりしや。余之を信ずる能はず」と（Valeur d'apres les Économistes Anglais et Français, p. 379）。其は J. B. Say の出現と共に展開し行く第二期の發達に徵して知る可きのみ。（未完）。

生產的及び不生產的なる語に就て（二）

榎本鑛治

九

前號に紹介したる所は、ジョン・スチュアート・ミルが彼の「經濟學上未定の諸問題」第三論中に論述せる見解の大要であるが、轉じて彼の大著「經濟學原理」中に生產的及び不生產的なる語を

用ひたる所を尋ねるに、其の第一篇第三章「不生産的勞働に就て」は、專ら生産的勞働及び不生産的勞働を取扱ひ、側ら生産的消費及び不生産的消費に關說せるを見るのである。依て其の大要を窺ひ、然る後に前著「經濟學上未定の諸問題」中に於ける見解と相違する所ありやを檢しやう。

即ちミルの見解に從へば勞働は生産に缺く可らざるものではあるけれども、常に必ずしも其の結果が生産ではない。何となれば社會には非常に有用なる勞働が多々あるも、而も其の對象は生産に非ざるものがあるからである。茲に於て勞働は生産的及び不生産的に區別される。但し如何なる種類の勞働が不生産的と考へらる可きかに就ては、多數の經濟學者間に少なからざる論爭がある。

勿論多數の經濟學者の所謂生産的勞働とは、其の勞働の成果が一人より他人へ讓渡せられ得可き或る物質的對象の形態に於て吾々の手に觸れるものたる場合に限らるゝのである。併し他方にはマッカロックやセイの如く不生産的なる說を斥けて、有用と看做さるゝ或る勞働、即ち費用に匹敵する利益又は快樂を生ずる或る勞働をば不生産的と呼ばざるものがある。從てマッカロック、セイ流の見解を以てすれば辯護士、敎員、音樂家、舞踏家、俳優、下女、下男等の勞働と雖も不生産的ではないのである。何となれば彼等には、不生産的なる語が「浪費の」若くは「無價値の」(wasteful or worthless) なる語と同義の如く思はるゝからである。併し斯る見解は論題を誤解して居るやうである。即ち生産は人間の存在上に於ける唯一の目的に非ざるが故に、不生産的なる語は必ずしも或る汚名を含むものではない。要するに是れは、單なる言語及び分類の問題に外ならない。而も言語の相違は甚だ重要である。何となれば生産的及び不生産的なる二語の何れを以てするも其の全眞理と一致するものではあるが、一般には二語共に其の全眞理の一部分を捉へるに過ぎないからである。然らば生産的勞働及び不生産的勞働の意義は如何。之がためには先づ生産なる意義を定めなければならぬ。

今例へば物質的物件の生産に就て云へば、生産せらるゝものは確かに其の物質的物件を構成する物質(matter)ではない。又總ての人間の勞働は何れも物質の一微片をさへ生産し得ないのである。從て吾々は物質を創造することが出來ないけれども、吾々は物質に種々の性質を與へて無用物をば有用物ならしめ得るのである。即ちセイの云へる如く、吾々の生産するものは常に效用(utility)である。故に勞働は物件を創造するものではなくして、效用を創造するものである。逆に吾々は物件其物を消費したり、又は破壞したりすることが出來ない。去れば消費若くは破壞の結果殘存するものは、其の形態に多少の變化こそあれ、其の物件を構成する物質其物である。換言すれば眞に消費せらるゝものは、其の物件が適用せらる可き目的に相應せる諸性質に外ならない。故にセイ其の他の經濟學者に依て問はるゝ如く、何故に效用を生産する總ての勞働は生産的とのみ考られ得ざるかと云ふことゝなるのである。例へば司法官や醫師や立法家や金剛石磨人等の勞働は何故に不生産的なりやと云ふことゝなるのである。如何にも總ての勞働は效用を生産するものである。而して若し效用の生産なる說が充分に生産的勞働の觀念を表現するならば、此の問題は自ら消滅してしまう。然らば生産的及び不生産的なる語は何

等か省略せる所のある表現にして、其の中には當然生産せらるゝ或る物件の觀念を包含するものである。而して通說に依れば此の或る物件とは效用を指すには非ずして、富を云ふのであると思ふ。併し茲にはミルの富に關する見解を省略するが、富の定義は既に前稿(三)の中に紹介してある。(Mill, Essays p. 76; Mill, Principles of Political Economy, 1848, edited by Ashley, p. 9.)

十

然るにミルの所說を追へば、勞働に依て生産せらるゝ效用には次の三種類がある。

（第一）外的對象に固著體化せられたる效用

（第二）人間に固著體化せられたる效用及び

（第三）如何なる對象にも固著體化せずして一の働き (a service rendered) たるに留まる效用

是れである。即第一の效用は、外界の物質的物件をして人間に役立たしむる所の諸性質を其物質的物件に與へる場合に使用せらるゝ勞働に基づくものにして、通常の場合は總て之に屬するのである。又第二の效用は、各個の人間をして自他に役立たしむる所の諸性質を人間に與へる場合に使用せらるゝ勞働に基づくものにして、例へば教育上に於ける教師の勞働や保健上に於ける醫師の勞働の如きは之に屬するのである。最後に第三の效用は、期間の長短に關せず、與へらるゝ快樂、避けらるゝ不便若くは苦痛に基づくものなるが、或る人又は物の改善されたる諸性質上に全然永續的習得 (a permanent acquisition) を殘さぬものである。換言すれば斯る種類の效用は、勿論直接に效用を生ずる場合に使用せらるゝものなれど、第一及び第二の場合に於けるが如く或る他の物件をして效用を生ぜしむる場合に使用せらるゝものに非ざる勞働に基づくのである。例へば音樂家、俳優、興業師、軍人、立法者、司法官、一般官吏等の勞働の如きは之に屬するのである。

然らば如上三種の效用中何れが生産的なりや。之に就てミルの見解は下の如くである。即ち第三の效用は享樂せらるゝ間のみ存在する快樂より成り、又演習せらるゝ間のみ存在する勤勞より成るが故に富とは云へない。但し之には多少の例外があつて、衆知の隱喩の場合を除くものである。今論旨を明瞭ならしむるために、ミルの富に關する所說を略記しやう。元來富なる觀念に取ては集積せられ得ると云ふことは缺く可らざるものである。即ちミルの思考する所に從へば、生産されて使用せらるゝ迄若干の期間に亘て貯藏保有され得ざる物件は、毫も富と看做されないのである。何となれば如何に其の多量が生産され享樂せらると雖、之に依て利益を享くる人は聊かも富裕とならず、又彼等の境遇が決して改善されないからである。併し集積し得る有用の生産物をば富と考慮する場合には、慣例に對する斷乎たる違背の事實がないのである。而して一國に於ける工匠の熟練、精力、及び努力は、彼等工匠の道具及び機械と同樣に其の國に於ける富の一部分と考へらるゝのである。此の定義に依れば人間に體化せられたること、將又或る他の有生的若くは無生的對象に體化せられたることを問はず、永續的效用の創造に使用せらるゝ總ての勞働は、之を生産的と考へなければならぬ。去ればミルは、依然として前著「經濟學上未定の諸問題」中の所說を支持するのである。「前號所載拙稿七參照」

併し所謂非物質的生産物 (immaterial product) を富と考へる場合には、通常暗默の間に物質的生産物との關係を是認して居るやうである。即

ち工匠の熟練にしても、物質的意義に於ける富の獲得手段たる場合にのみ富と考へらるゝのである。換言すれば賣買せらる可き物品と看做さるゝ場合を除けば、人間の天才、有德、藝能等は富と考へられないのである。從て生産物の永續性に重きを置く新術語を案出せざる限り、非物質的生産物は一般に富と看做され難いのである。

斯る見解のミルに依れば、富とは專ら所謂物質的富を指すのであり、又生産的勞働とは主として物質的對象に體化せられたる効用を生産する努力を指すのである。併しミルは生産的勞働を斯る意義に限定するとは云ひながらも、尙ほ其の制限されたる意義の範圍を極度に伸長するものにして即ち其の直接の成果として物質的生産物を生産せずとも、其の窮極の結果が物質的生産物の增加である場合には其の勞働を指して生産的勞働と稱するに憚らないと斷言して居る。從て物品を製造する熟練の習得に投ぜられたる勞働は生産的勞働となさるゝのである。併し夫れは熟練其物に基づくには非ずして、其の熟練に依て創造せらるゝ製造品に重きを置くのである。何となれば其の熟練の創造には、其の職業を習得する勞働が根本的に役立つからである。其の他官吏の勞働も、亦産業の隆盛上に缺く可らざるものなるが故に生産的勞働と云ふことが出來る。但し此の勞働は農夫や棉絲紡績工の勞働の如く直接的性質を有せずして、間接的性質を有するものである。要之ミルの見解を摘記すれば、如上の第一及び第二の效用を生産する勞働は、何れも生産的勞働と呼ばる可きである。就中第一のものを以て生産的勞働と呼ぶのである。反之第三の效用を生産する勞働は不生産的勞働と呼ばるゝのである。以下少しくミルの不生産的勞働に對する說明を聞かう。

十一

ミルに從へば不生産的勞働とは何等物質的富を創造せざるものを云ふのである。即ち不生産的勞働は如何に有利に行はるゝとも一般社會を富裕ならしめずして、却て勞働者が不生産的に消費する數量丈け一般社會を貧困ならしむるものである。通常經濟學の術語を以て云へば、享樂の永續的手段の現在集積量を全然增加せしめずして直接的享樂の目的と終始する所の勞働は、總て不生産的勞働である。今ミルの與へたる定義に從へば、永續的利益に終る勞働と雖も、若し何等の物質的生産物を增加せしめずとすれば、如何に重要なる勞働であるとしても、不生産的勞働の中に加へられなければならぬ。例へば或る友人の生命を救濟する勞働の如きにしても、其の友人が生産的勞働者にして自己の消費する以上に生産する時には、生産的勞働の中に加へらるゝが然らずんば不生産的勞働と云ふのである。之に類似するものには僧侶、宣敎師等の勞働がある。勿論一般的には僧侶、宣敎師等の勞働は、一國の物質的生産物の集積量を減少させるものと考へらるゝが故に、不生産的勞働と稱せらるゝのを常とする。

乍併不生産的勞働は、生産的勞働と同じく有用であらう。或は其の使用が單なる快樂的感覺に留まつて、其消滅せる後に一の痕跡をさへ殘さゞることもあらう。或は斯る感覺をさへ與へずして、全く浪費に終ることもあらう。何れにしても不生産的勞働の場合には社會若くは人類は毫も其の富を增加せずして、貧困に陷るものである。今一物をも生産せざる人に依て消費せられたる總ての物質的物件は、一時社會の總物質的生産物中より減少するものにして、若し不

生產的に消費せられなかつたとすれば、社會は夫れ丈け餘分に所有したる筈である。併し社會は、不生產的勞働に依て富裕とならぬものではあるけれども、之を個人的に觀れば一概に然りとは云へまい。即ち或る不生產的勞働者は、自己の勞働より快樂若くは利益を所得する人々に依て、富の源泉となる可き報酬を與へらるゝであらう。併し不生產的勞働者の利得は、相手の損失に依て平均されるのである。換言すれば不生產的勞働の購買者は、彼等の支出と全然等價値なる物件を收受するには相違ないが、彼等は之がために夫れ丈け貧困となるのである。例へば俳優の給金は、觀客の基金中より捻出されるものではあるが、觀客に取ては何等富を與へられないのである。即ち社會全體より觀れば俳優の勞働は何物をも生じないのである。從て其の俳優が自己の收入の一部を貯蓄すれば、夫れ丈けが生產的である。斯く云へばとて不生產的勞働は、社會を毫も富裕ならしめないと斷ずるものではない。例へば伊太利の歌劇役者や佛蘭西の舞踏家等が他國に於て興行して、其の利得を自國に送金する場合には斯の如き不生產的勞働も、亦夫々伊太利なり佛蘭西なりに取て富の一源泉となるのである。其の他一國が他國へ侵略して其の國の物品を掠奪し去るが如きも、亦然りである。併し斯の如き勞働と雖も、之を世界全體より觀れば何物をも此の世界に殘さゞるものである。去れば斯の如き勤勞は、若し有用なりとすれば、世界的に物質的富の一部を犧牲に供して獲得せられたるものである。又若し夫れが無用なりとすれば、夫等の勞働者の消費する一切は世界に取て浪費であつたのである。

乍併浪費に陷るは、獨り不生產的勞働に限るものではない。若し生產費が生產物の價格よりも多額であるとすれば、生產的勞働も亦浪費に歸するのである。又若し勞働が熟練を欠くか、若くは指導者が判斷を欠きて生產的產業の適用を誤まるとすれば乃至は二匹の馬と一人の勞働とを以て耕耘する農夫ありとすれば、其の餘剩勞働は假令生產の目的に使用せられたとするも畢竟浪費に終ると謂ふ可きである。其の他新方法が發見せられたる場合に其の效果が舊方法に優る所なしとすれば、其の發明及び之が費用に投せられたる勞働も、同じく浪費に終るものと謂はなければならぬ。併し生產的勞働と雖も一國民を貧困ならしめることがある。即ち其の勞働の生產する富、換言すれば其の勞働に依て增加せられたる有用若くは快適なる物件が直接に欲求せらるゝ種類に屬する場合是れである。例へば生產量が現在の需要量に超過したる時の如き、又は投機家が商業上の必要に先立ちて船渠及び倉庫を建設するが如きである。

續いてミルの與へたる生產的消費及び不生產的消費の意義を尋ねやう。

十二

扨て生產的及び不生產的なる區別は、勞働に於けると等しく、消費にも適用することが出來る。社會の全員は、悉く勞働者とは云へないが、彼等は悉く消費者ではある。而して其の消費は生產的なるか將又不生產的なるか、其の一である。ミルに依れば(イ)執行の勞働たると指導の勞働たるとを問はず、生產的勞働者は何れも生產的消費者である。之に反して(ロ)直接たると間接たるとを論ぜず生產に何等の貢獻をなさゞる者は不生產的消費者である。併し生產的勞働者の消費と雖も、悉く生產的消費者ではない。何となれば生產的勞働者も時には不生產的消費

をなすからである。即ち生産的勞働者が其の健康なり其の精力なり其の能力なりを維持し又は改善するために、或は自己を相續す可き生産的勞働者を養成するために消費する者は、生産的消費である。併し快樂又は奢侈に對する消費は、其の怠墮者に依ると將又勤勉者に依るとを問はず、不生産的消費中に加へらる可きである。何となれば生産は其の目的でなく、又之に依て生産は毫も進捗せしめられないからである。但し享樂に資せらるゝものと雖も、或る程度迄は必要品の中に加へらる可きである。何となれば夫れ丈けの享樂を用ひなければ勞働の最大能率を發揮することが出來ないから、斯る部分は生産的消費としなければならぬ。然らば一般に生産的消費とは何ぞや。曰く社會の生産力(productive powers)を維持し又增加するもの是れである。而して其の生産力は、土地に在ると其の生産原料に存すると、其の生産要具に在ると、將又、其の人々に存するとは之を問はないのである。

乍併社會には唯だ不生産的消費の目的にのみ供せらるゝ生産物が多々ある。例へば金モール鳳梨等の年々の消費は不生産的である。然らば通常經濟學者の用法に從へば、是等の物件の生産に使用せらるゝ勞働は不生産的であると云はなければならぬ。茲に於てミルは次の如く斷言して居る。曰く「不生産的消費者の使用に供せらるゝ物件を生産する勞働は、洵に社會を永續的に富裕ならしむるものに非ず」と。かの不生産的人間のために洋服を調製する洋服屋は生産的勞働者なれども、數週後又は數月後に至れば其の洋服は著破られて、而も之を著したる者は其の代替物を一も生産せざるものである。然らば社會が洋服屋の勞働に依て毫も富裕とならざるは恰かも劇場の一席を購ふために同額を支拂へると同樣である。但し其の洋服の存在する間は、社會の富は洋服屋の勞働に依て增殖せられしものである。又前述の金モール及び鳳梨の場合にしても、其の消費せられざる間は明かに富の一部分である。

以上に依て吾々は、一社會の富に取て生産的勞働及び不生産的勞働の區別よりも一層重要なる區別の存することを知るのである。即ち其の區別とは、生産的消費に物品を供給するための勞働、及び不生産的消費に物品を供給するための勞働是れである。換言すれば一國の生産的資源を維持し又之に附加するために雇傭せらるゝ勞働と然らざる勞働との區別是れである。次に之に對するミルの說明を紹介して、ミルの所說を完結せしめやう。

抑も一國の生産物に就て云へば、(イ)生産的に消費せらる可き運命を有するものは、其の一部分に過ぎないのである。(ロ)而して、其の殘餘の部分は、生産者の不生産的消費と不生産的階級の全消費とに用ひらるゝものである。今年生産の中(イ)の目的に適用せらるゝ割合が、其の半ばに及ぶと假定せよ。(一)然らば其の國の永續的富が依存す可き作業に從事するものは、即ち其の國の生産的勞働者の半數に過ぎないのである。(二)而して他の半數は、毎年歲々子々孫々報酬なくして消費せられ又滅失す可き物件の生産に從事する譯である。去れば此の半數の人々が消費するものは、悉皆國民的資源の上に永續的結果を及ぼさゞるものにして、恰かも不生産的に消費せらるゝと同一である。

之に反して今生産的勞働者の後半（即ち(二)の勞働者）が作業を中止して、政府若くは數區

十三

よりの支給に依て一年間無爲に過したと假定せよ。併し若しも生產的勞働者の前半（即ち(一)の勞働者）が其の勞働に從事するとせば、從前の如く彼等自身の必要品と他の人々（即ち(二)の勞働者）の必要品とを供給するに足り、又原料及び要具を毀損せずに維持するに足るであらう。尤も之がために不生產的階級は、飢餓に苦しむか或は夫自身の生活資料を生產せざる可らざるかに至り、而して全社會は一年間單なる必要品を以て滿足せざるを得ないであらう。併し生產の源泉は毫も損害を蒙むらざるが故に、翌年に及んで必ずしも生產の減少を來すことはないであらう。恰かも其の狀態は、前述せる(二)の勞働者が一定期間其の活動を中止せざりし場合と同樣であらう。然るに之と反對に若し(一)の勞働者即ち生產的勞働者が其の通常の職業を中止して、(二)の勞働者即ち不生產的勞働者が其の職業を繼續するとすれば、十二ヶ月の後に於ける其の國は全然貧困の境界に陷るであらう。

乍併富裕なる國に於て其の年生產の多量が不生產的消費に供せらるゝことを遺憾に思ふは甚だしき誤謬であらう。勿論社會が其の必要品を割きて快樂のために又總ての高尙なる使用のために充つること多きは、悲しむ可きであらう。而も此の部分の生產物は、單なる生活の欲望を除外して其の社會の凡ゆる欲望に供する爲めの基金である。詳言すれば此の基金は其の享樂の手段と總ての不生產的目的を遂行する力との規矩（the measure of its means of enjoyment, and of its power of accomplishing all purposes not productive）である。去れば斯の如き目的に適用せらる可き餘剩の多額なることは慶賀す可きことゝ謂はねばならぬ。此の場合に注意す可きことは、此の餘剩の分配上に於ける不平等である。即ち其の餘剩の大部分は價値の僅少なる對象に分配せられて、等價値の報酬的勤勞を齎らさゞる人々の手に落つると云ふが如きことのなきやうに注意す可きである。何となれば斯る分配上の不平等は、注意さへ施せば免れ得ることであるからである。（J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, 1917, Bk. I, ch. III, pp. 44-53.）

上來解說せる所は、ミルが其の「經濟學原理」に於て生產的勞働及び不生產的勞働、生產的消費及び不生產的消費に關說したる大要である。而して斯る主題の下に說明したる論旨は、彼の前著「經濟學上未定の諸問題」中に論述せる見解と全然同一である。此の事實は、ミル自身も明かに認むる所にして現に其の「經濟學原理」第三章第三節の中頃に於て次の如く斷言して居る。

曰く「余は旣に前著（經濟學上未定の諸問題を指す）中に於て此の術語（即ち生產的なる語）をば分類の諸目的に最も役立つものとして推擧したり。而して余は、今日も尙ほ依然として前著に於ける見解を支持するものなり」と。（Mill's Principles of Political Economy, edited by Ashley, p. 48）

今如上に解說したる所を左の如く分類すれば、一目瞭然たるものがあらう。

- 社會各員
  - 甲、生產的勞働者……例へば農夫洋服屋等
  - 乙、半生產的勞働者……例へば敎師醫師等
  - 丙、不生產的勞働者……例へば俳優音樂家等
- 生產的勞働者
  - (イ)生產的消費に對する富の生產者（但其の富は年生產の半分とす）
  - (ロ)不生產的消費に對する富の生產者（但其の富は年生產の半分とす）

今之を消費の立場より觀れば、甲は生產的消

費者に屬し、乙は半生產的消費者に屬し、又丙は不生產的消費者に屬するのである。從て（イ）の勞働者が其の勞働を中止すれば、（ロ）の勞働者も乙の勞働者も丙の勞働者も其の日用必需品を求むること能はずして、其の本業を廢止せざるを得ないであらう。然るに（ロ）の勞働者は其の生產物の點より觀れば富を生產するには相違ないが、其の富は不生產的消費に供せらるゝが故に、（イ）の勞働者の存在する限り、（ロ）の勞働者の勞働中止は社會に多大の影響を與へないのである。勿論經濟上より離れて考ふれば、（ロ）の勞働者は望ましきものである。何となれば其の勞働は、人間をして其の日用必需品以外に便宜と快樂との手段を獲得せしむるからである。

之と同樣に既述の「經濟學未定の諸問題」中の見解を簡單に表示すれば左の如くである。

社會各員
- 甲、生產的勞働者……例へば棉絲紡績工、機械師等……生產的消費者、
- 乙、半生產的勞働者……例へば司法官、警察官等……半生產的消費者、
- 丙、不生產的勞働者……例へば舞踏家、音樂家等……不生產的消費者、

是等の表に基づきて二著の間に於けるミルの見解の相違を約言すれば、夫等の擧例に依ても知らるゝ如く、所謂物質的富を生產する場合を主として生產的と稱し、所謂非物質的富を生產する場合を半ば生產的にして半ば不生產的と唱へる結果になるのである。而も此の點はミルが明かに其の「經濟學原理」中に說ける所にして、彼が前著と後著との間に於ける著しき差異の一であらう。又前者に於ては司法官、警察官、一般官吏等の勞働は半ば生產的にして半ば不生產的として是認したるも、後者に於ては大體不生產的の部類に數へて、俳優、音樂家等と同一視せるものである。是れも亦二著の間に於ける差異の一であらう。即ち二著の間には內容擧例等に多少の相違があるけれども、併しミルは依然として生產的及び不生產的なる區別を採用するものである。否、彼は此の二說の意義を强調して、經濟學上主要なる術語の一と認めて居るのである。

然らば現今の經濟學者は、斯る見解を妥當と見るや否や。是れ最後に生ずる疑問である。依て私は聊か斯る見解に關する歷史を辿りて、最後に其の是非を試みやう。

科學的社會主義は如何にして可能なりや（下）

平井新

二

エンゲルスの記す所に據れば、近世社會主義は現在社會に行はれつゝある有產者對無產者、資本家對勞働者の階級鬪爭の所產である。近世社會主義其者が科學的認識の純粹の運動たり得ない事は明白である。階級鬪爭は利害の鬪爭である。而も此鬪爭の動因となる利害が縱令多少乍ら明瞭に認識されて居なければならず、且つ又原始的には單に偶然的な、單に場所的な、職業的な且つ單に從屬的な事物を繞る此有產者對無產者の鬪爭を、普遍的歷史的階級鬪爭と看做す事が、何等かの社會的諸關係に對する進步的認